山中遺跡（やまなか）

調査の経過

濃尾平野のほぼ中央に位置する一宮市は、犬山扇状地の扇端部でもあることから、伏流水が沸き出す水の町として、古くから多くの産業と文化を育んできた。そして市域西方に位置する萩原町周辺では、木曽川により形成された自然堤防がよく発達し、北から山中遺跡・南木戸遺跡・苗代遺跡・二夕子遺跡・河田遺跡と、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している。なかでも、山中遺跡は弥生時代後期の標式遺跡として著名であり、その発見は昭和34年に遡る。県立尾張病院建築、改築に伴い昭和34年に第１次調査、昭和55年に第２次調査、続く昭和56年に第３次調査が行われ、縄文時代晩期から弥生時代全般にわたる遺構・遺物が検出されている。

今回、県立尾張病院の改築に伴い、その事前調査として、3500㎡にわたる発掘調査を実施した。Ａ～Ｈの８つの調査区を設定し、調査期間は４月～９月であった。調査の結果、竪穴住居・方形周溝墓・水田などをはじめとする縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけての遺構・遺物を良好な状態で検出することができた。（日比　宰）

調査の概要

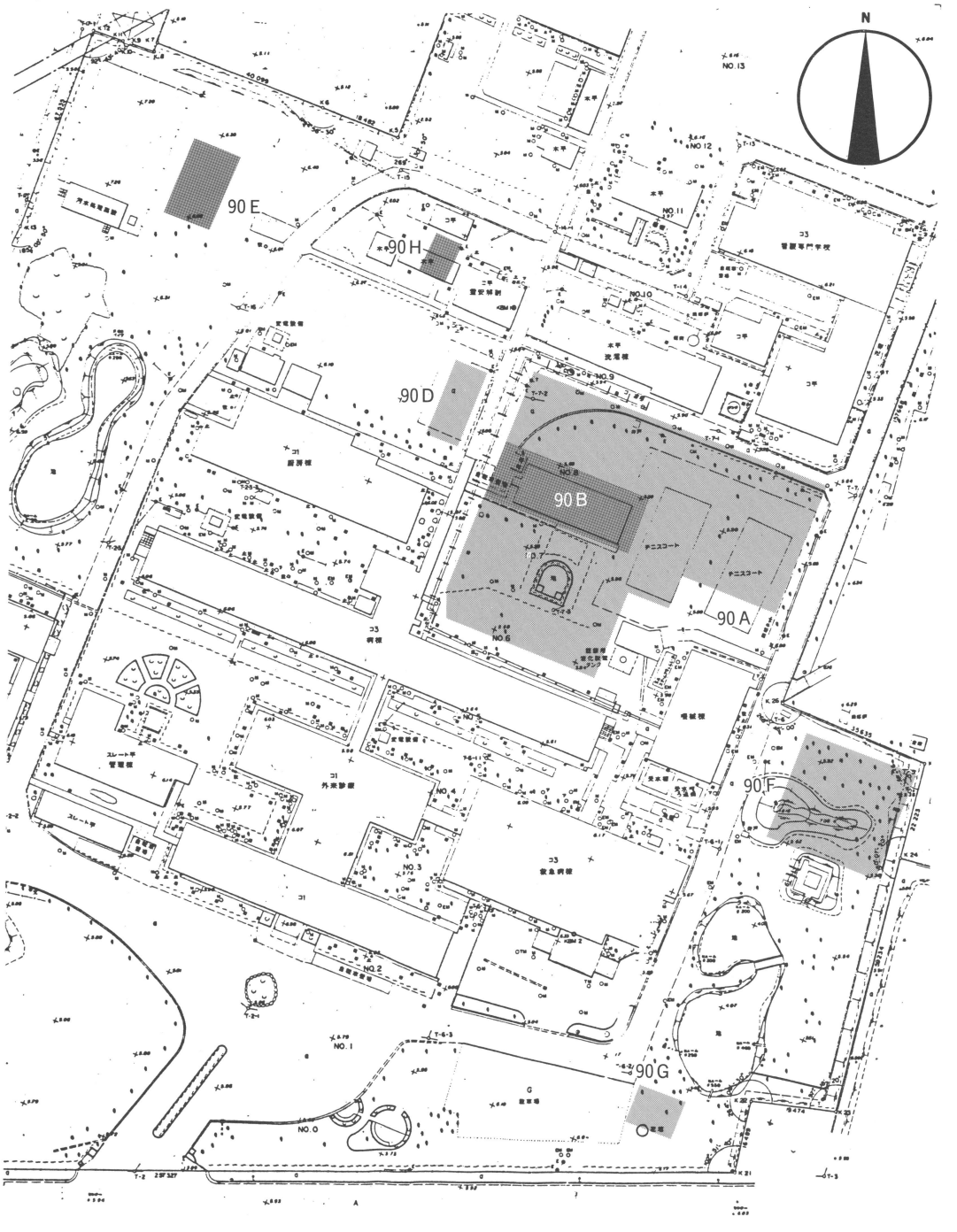
山中遺跡は、弥生時代後期の標式遺跡として著名である。今回の調査で確認された遺構・遺物は、弥生時代前期（Ⅰ期）と弥生時代後期から古墳時代初頭（Ⅱ期）の二時期に大別することができる。以下、各調査区ごとに、その概要を述べる。

Ａ区　Ⅰ期の遺構としては、竪穴住居・方形周溝墓・環濠の可能性が考えられる大溝・石器製作関連遺構があり、県下で初めて稲作農耕定着期のムラの一端が明らかとなった。Ⅰ期の遺物は、遠賀川式土器と条痕系土器が約半数ずつ出土し、下呂石を石材とする石器も出土した。Ⅱ期の遺構としては、主体部と祭事跡を伴う方形周溝墓があり、当時の埋葬状況を知る上で貴重な資料となった。

Ｄ区　Ⅱ期の方形周溝墓を検出したが、古代から近世の遺構・遺物も散在的に見られた。

Ｆ・Ｇ区　Ｆ区では、主体部が残存するⅡ期の「前方後方型墳丘墓」を検出し、この時期の墓制の展開を考える上で興味深い資料となった。Ｇ区では、Ⅱ期の水田跡を検出し注目された。

調査区の基本層序は、第Ⅰ層が尾張病院建設時の整地層及び旧耕作土で、第Ⅱ層が暗褐色シルト層で、遺物を包含する。第Ⅲ層が黄褐色シルト層で、遺構検出面となる。（鷲見　豊）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/3000）

A区

竪穴住居

SB	規	模(m)	深さ(cm)
10	5.4	−	8
11	6.1	−	12
12	5.3	5.2	8
13	4.1	4.0	7
14	−	−	6
15	−	−	13
16	3.9	3.0	17
17	4.6	−	10
18	5.4	−	12
19	4.2	4.0	1

方形周溝墓

SZ	規	模(m)	溝幅(m)
01	(9.5)	9.4	0.8
02	(10.0)	(7.0)	0.8〜1.0
03	10.8	10.5	1.2〜1.9
04	(8.0)	6.7	1.2〜1.7
05	(5.6)	(4.2)	0.5〜0.7
06	6.5	5.6	0.6〜1.0
07	6.5	(5.1)	0.4〜1.1

10	13	−	6 〜 7
11	−	−	3.4

遺構

弥生前期

弥生時代前期の遺構としては、竪穴住居10棟・方形周溝墓７墓・環濠の可能性が考えられる大溝２条・石器製作関連遺構等がある。遺構は調査区のほぼ全域で確認されており、環濠と考えられるＳＤ62によって、竪穴住居が集中する居住域と方形周溝墓が築造された墓域とに明確に区分される。竪穴住居は重複して検出されており、いずれも一辺５ｍ前後の規模であり、方形状を呈する。特にＳＢ17は、石器製作に関連すると考えられる下呂石の原石・石核等がまとまって出土しており、周辺に展開する石器製作関連遺構（ＳＫ50、ＳＫ75等）の存在とあわせ興味深い。方形周溝墓は、その規模より一辺10ｍ前後のＳＺ01〜03と６ｍ程のＳＺ04〜07の二群に分類することができる。いずれの周溝墓も、平面形態は四隅に陸橋部を有するタイプであり、所謂“東日本的周溝墓”の初現を示す資料として位置付けられよう。 (服部信博)

弥生後期

方形周溝墓２基を確認でき、その内ＳＺ10は、北溝を調査区外に置き、南西隅に陸橋部を設けるものである。また陸橋部から墳丘中央部にかけて11基の土坑が確認された。その内４基（ＳＫ29・47・55・56）を除いたものが主体部と考えられる。ＳＫ36は墳丘の中央部に位置し、東西方向に主軸を置く6.0ｍ×1.4ｍの規模を測る大型の墓壙。ＳＫ56は1.65ｍ×1.0ｍの土坑で、その内部より小型の土器３点が出土している（第６図１・２・３）。いずれも山中式土器に所属するものと考えられる。また東溝においてもほぼ同時期の土器（４〜７）が出土しており、ＳＺ10の築造を山中式後半の新しい段階に置くことができよう。規模は墳丘の東西13ｍ・南北13ｍ(推定)、周溝幅６〜７ｍ深さ0.4ｍを測る。(赤塚次郎)

その他

古代から中世の遺構が、調査区の西辺部を中心に散在的に分布しており、なかには、緑釉陶器・猿面硯・瓦塔など注目すべき遺物もみられる。

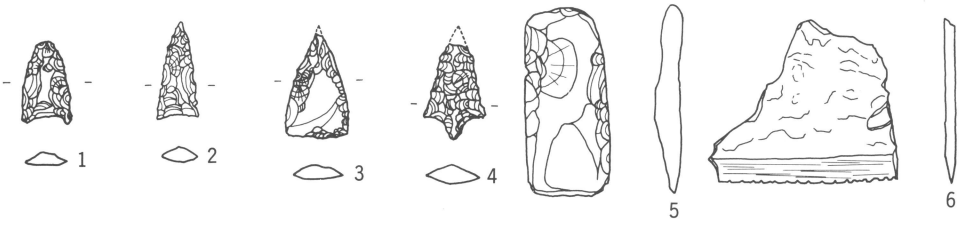
遺物

弥生前期（第５図）

今回の調査で出土した前期の土器については、遠賀川系と非遠賀川系とに大別することができる。遠賀川系に対する非遠賀川系の共伴率については、まだ整理途上であるため判然とはしないが、概算で約半数程度となるようである。

遠賀川系土器は壺と甕が出土しており、所謂「亜流遠賀川式」と呼称されるものが主体を占める。それらは形態・文様等の特徴よりみるならばおおむね前期新段階の範疇に含まれるものである。非遠賀川系の主体となるのは、条痕系土器（水神平式が中心）であり、外面がヘラケズリされた削痕の深鉢や大洞式系、大地型土器等がこれに加わる。特に、ＳＫ64・ＳＫ65出土資料は、遠賀川系土器を伴わず条痕・削痕の深鉢のみがみられ注目される。また、ＳＫ28からは大地型土器が良好な形で出土している。（服部信博）

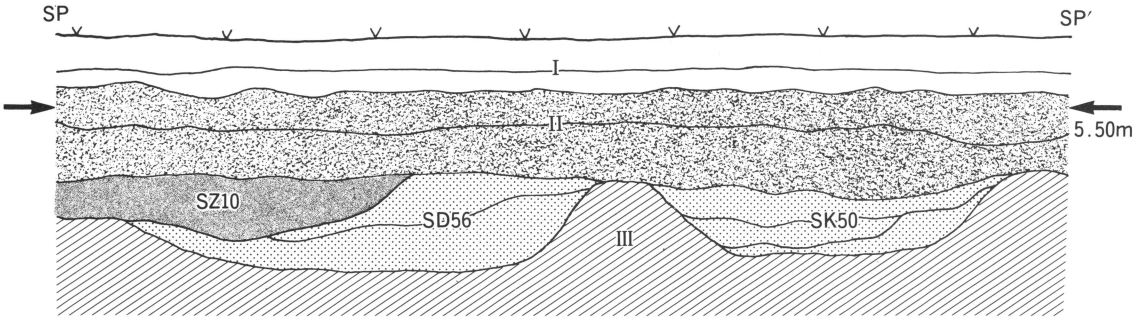
石器　今回の調査では、Ａ区全域、特に弥生時代前期の居住域を中心として、原石から製品に至るまでの石器製作過程を示す良好な資料を得ることができた。その総数は3300点余にのぼるが、中でも、ガラス質石英安山岩（下呂石）は、製作過程資料のほぼ全て、打製製品の９割以上を占める主要石材であり、製作技法、供給ルート等、数多くの問題を提起することとなった。また、ＳＢ17、ＳＫ32・50・57・75等の石器製作関連遺構の存在は、集落内における石器製作の空間的、人的分業体制の成立を物語るものとして注目される。製品は、石鏃・石錐・石斧・削器等、縄文的色彩をとどめるものが多いが、石庖丁など、周辺に弥生時代前期の水田遺構の存在を窺わせる貴重な資料も出土している。（金子健一）



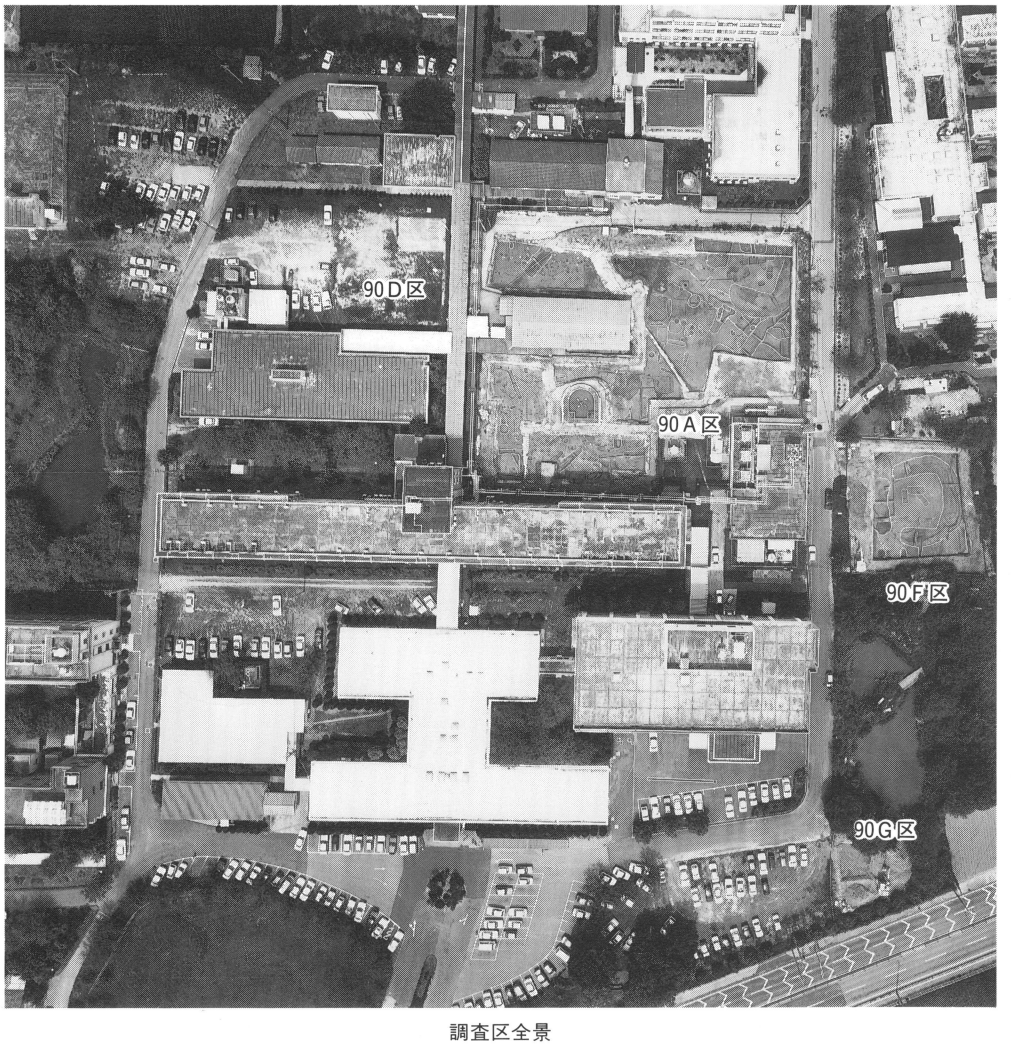
第２図　石器実測図（１～４　2/3・５～６　1/2）

弥生後期（第６図）

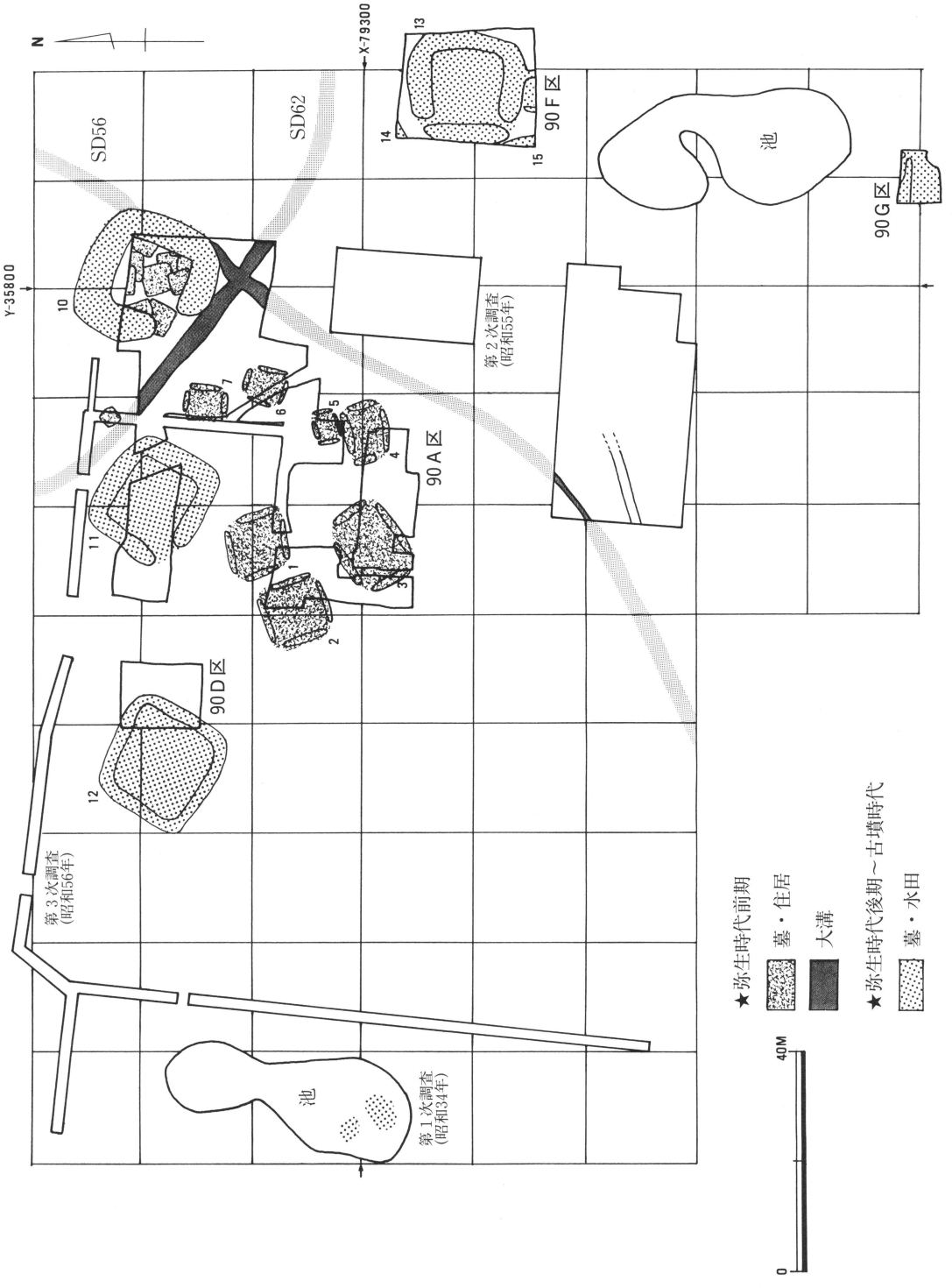
調査区南東に位置するＳＺ10より山中式土器が出土している。特にＳＫ56には小型の鉢２点（１・２）と壺１点（３）が見られ、１は口径15cmで口縁部が有段化する受口状口縁鉢。２は口径13cmを測る鉢で、端部に刺突文を施し、体部外面は密度の細かいハケメで調整し、内面はケズリを用いる。３は口径９cm、器高16cmを測る直口壺。その他４・５はパレス壺で、６は口縁内面に加飾を伴なう（剝落している）広口壺。７は受口系口縁甕。（赤塚次郎）



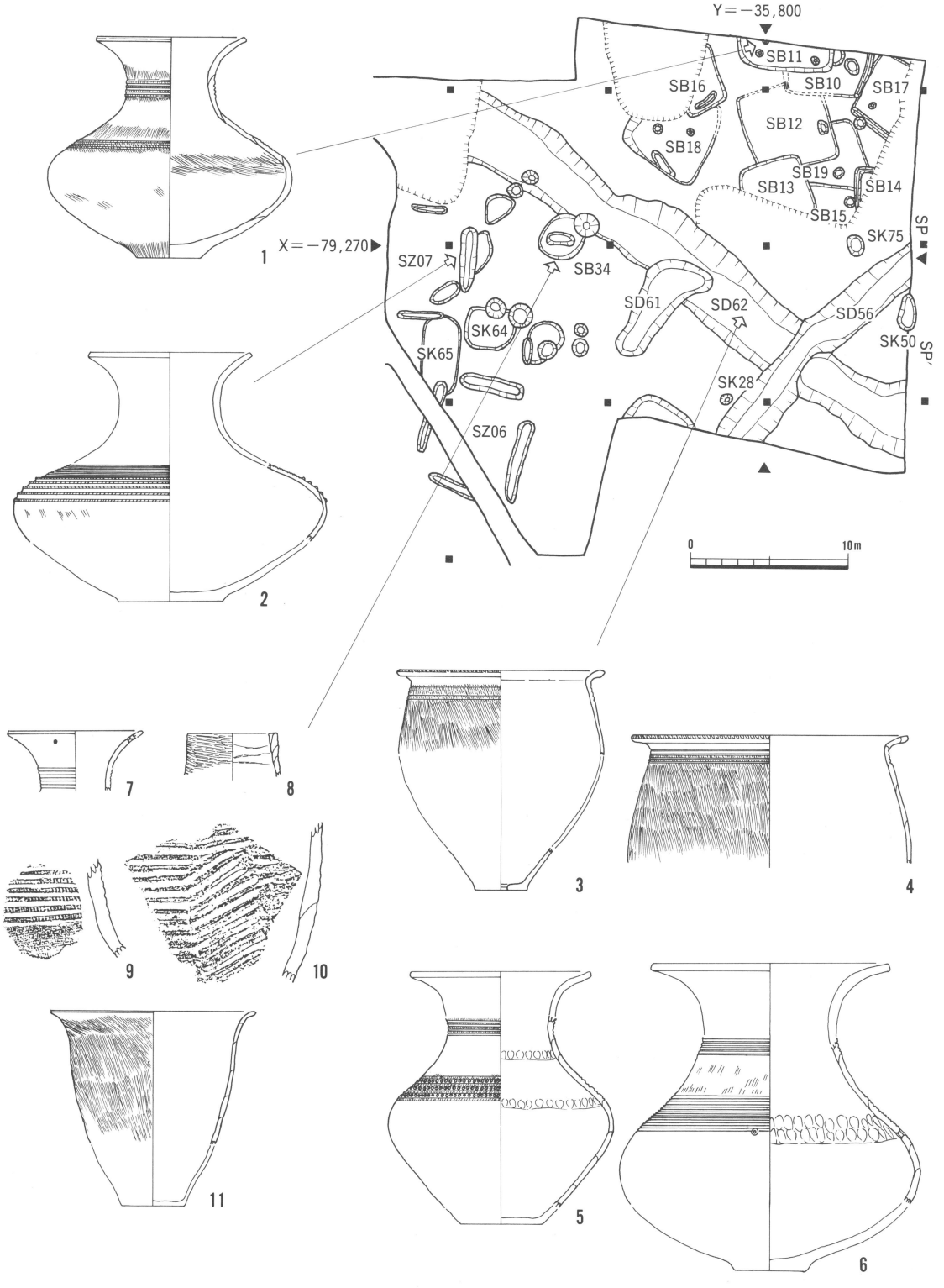
第3図　A区東壁部分土層断面図（1：50）



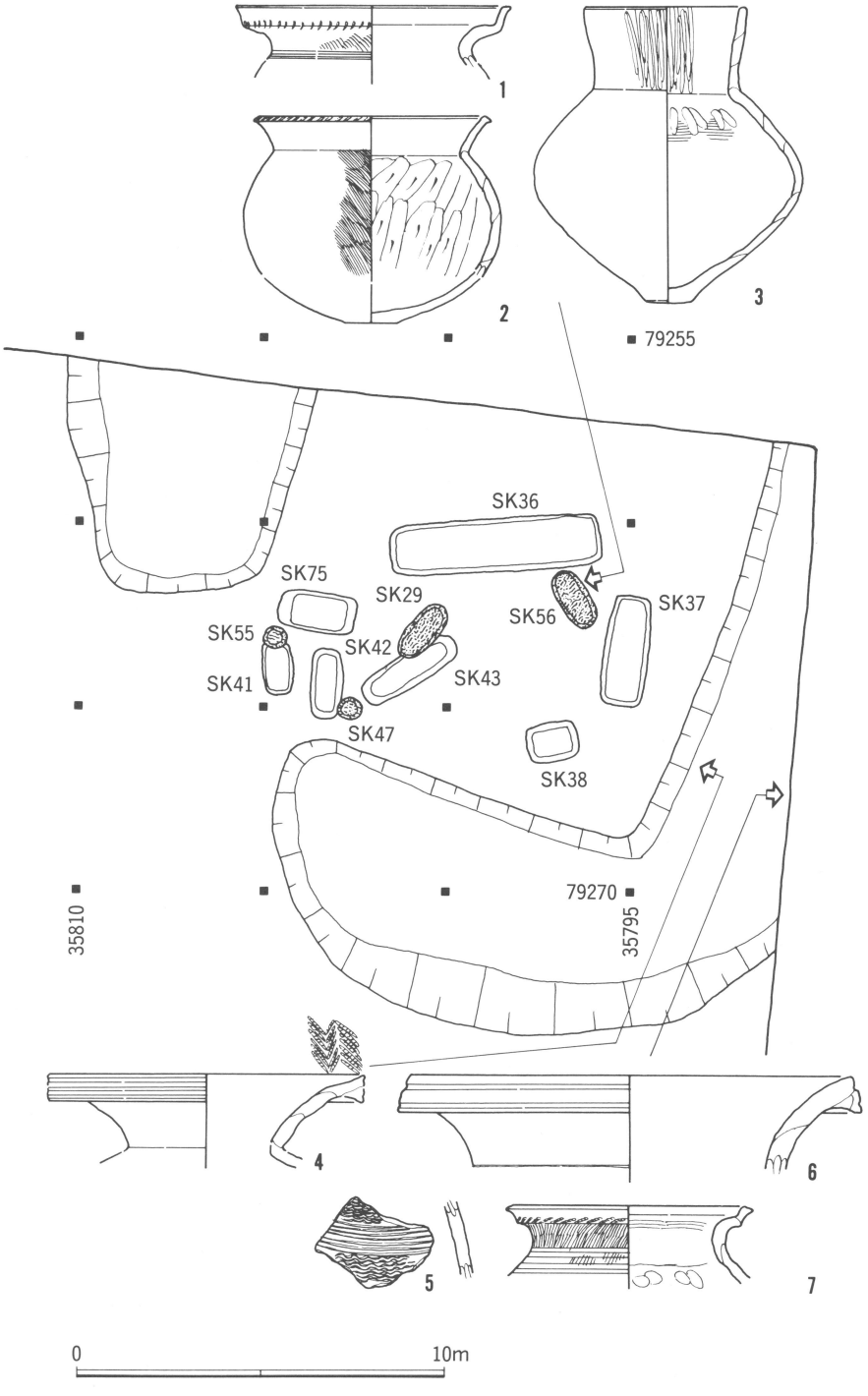
調査区全景



第 4 図　主要遺構配置図（1：1200）



第５図　弥生前期の主要遺構と遺物（遺構Ｉ：400、土器Ｉ：８、拓本Ｉ：３）



第６図　ＳＺ10（遺構１：200　遺物１：４）

D区

D区はA区の西に設定し、基本層序は、Ⅰ：淡茶灰褐色シルト、Ⅱ：明褐色シルト、Ⅲ：褐色シルト、Ⅳ：淡茶褐色砂質シルト、Ⅴ：黄褐色シルト（基盤）である。

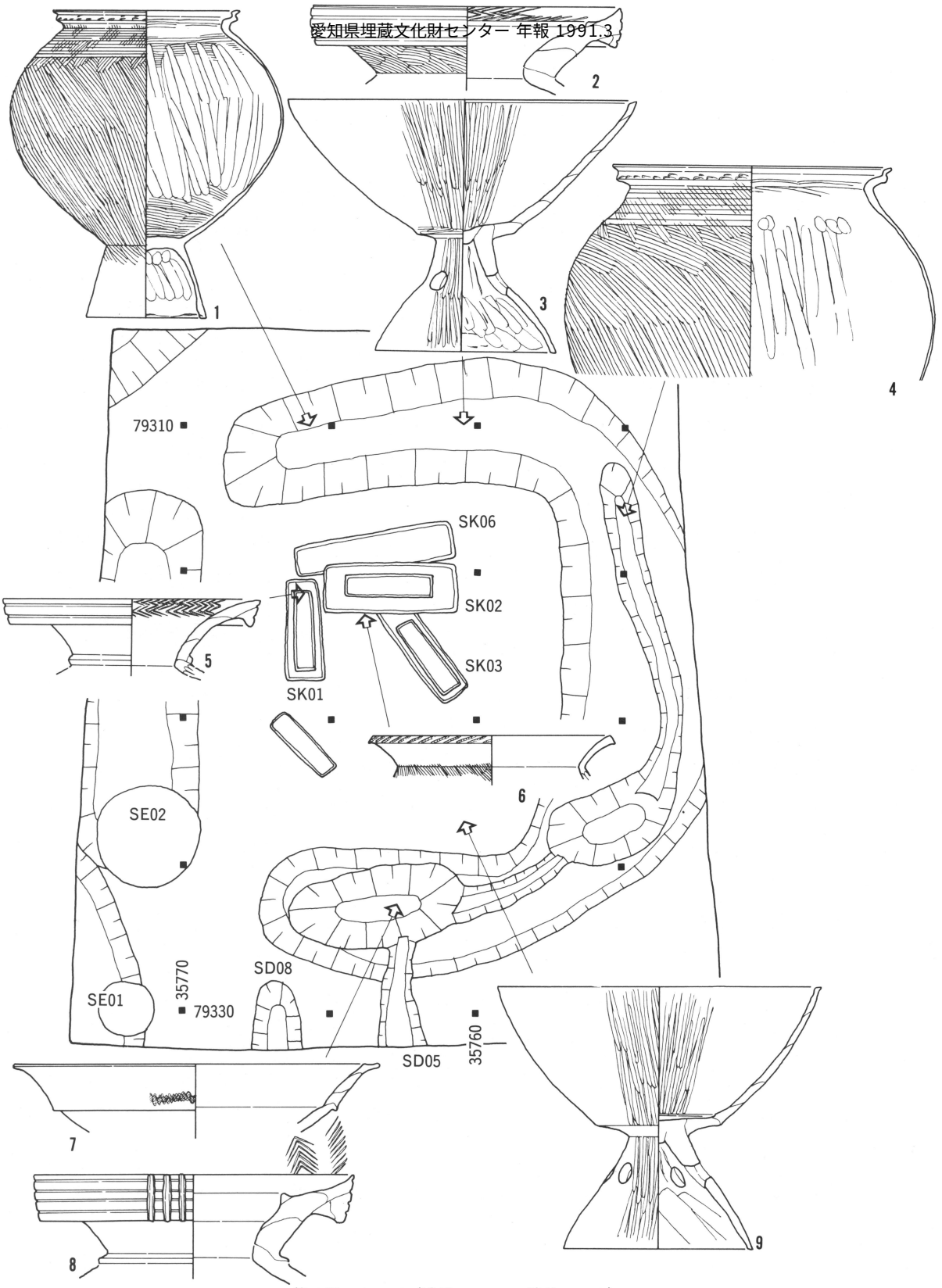
Ⅲ層上面において中世末から近世初頭にかけての溝４条、土坑多数を検出した。そのうち２条は２ｍの間隔を置いて平行し、道路側溝の可能性が高い。

Ⅴ層上面においては、古墳初頭から中世初頭にかけての遺構を検出した。調査区西側の屈曲する溝は方形周溝墓の周溝にあたり、畿内系有段鉢（廻間Ⅲ－３）を出土した。この鉢は、浅い椀状の体部に、鋭く２段に屈曲する独特の口縁部を有するもので尾張地方では、岩倉城遺跡下層で同様の鉢が２例出土している。また、この周溝は検出面で、幅2.5m、深さ0.3mを測り、一辺20mの規模を有する。調査区中央付近で井戸１基、北東隅で溝１条を検出し、さらに、井戸と溝の間にほぼ直角に折れ曲がる形で3.3m等間の柱列を検出した。これらの遺構は若干時期差はあるが、いずれも古代末から中世初頭のものであり、位置関係からも屋敷地を構成する遺構群と想定できよう。　（小塚俊夫）

F区

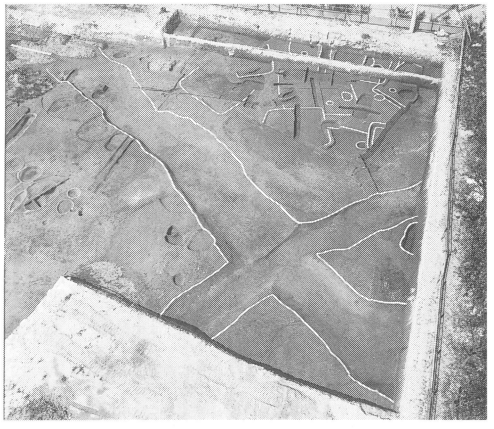
検出できえた遺構はほぼ２時期に分割できる。調査区西側に存在する井戸ＳＥ01・02とそれに関連する南北溝を中心とする鎌倉時代（12世紀）の遺構群と、調査区内全域に広がる方形周溝墓ＳＺ13を中心とする弥生時代後期の遺構群である。後者はＳＺ13の他、調査区北西と南西隅で検出しえた周溝の存在からさらに２基の周溝墓が近接して営まれていたものと考えられる。

ＳＺ13は南北15m・東西15mの墳丘を有し、周溝幅約４ｍ、深さ0.5mを測る。形状は北西部と南西部に陸橋部を持つもので、さらに東・南溝には溝の再掘削が観察できる。またそれに連続するＳＤ05と平行するＳＤ08は掘削状況と埋土の状態から周溝再改変とほぼ同時に構築された溝である可能性が高い。するとＳＺ13は南北に主軸を置き、南方へ前方部をとりつけた「前方後方型墳丘墓」とする推測がゆるされよう。主体部はやや北側に偏る形で５基検出することができた。中心となるＳＫ06・02は東西方向に主軸を置く。最も新しいＳＫ02は墓壙4.5m×1.9mで、内部に3.0m×0.8mの組合木棺の痕跡を確認することができた。築造時期はＳＫ01・02及び南溝最下層より山中式土器（５・６・７）が出土しており、弥生時代後期に所属する。また北溝より廻間Ⅰ式４段階（１・２・３）の土器群が出土している。さらに注目されるのは、廻間Ⅰ式３段階の土器（４・８）が東・南溝再掘削溝内より見つかっていることから、墳丘の改築が行なわれたのは遅くとも廻間Ⅰ式後半の時期であり、その時点で前方後方型に変形された可能性を考えておきたい。（赤塚次郎）



第７図　ＳＺ13（遺構１：200　遺物１：４）

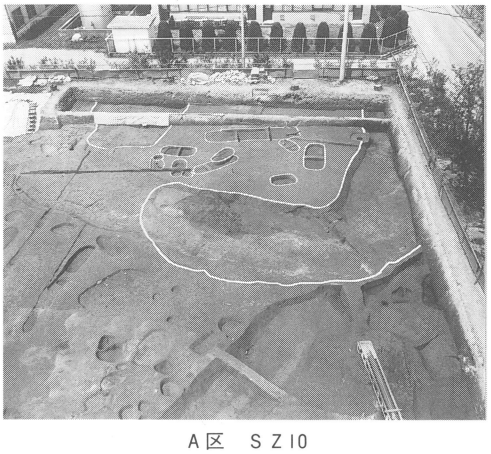
A区　弥生前期方形周溝墓



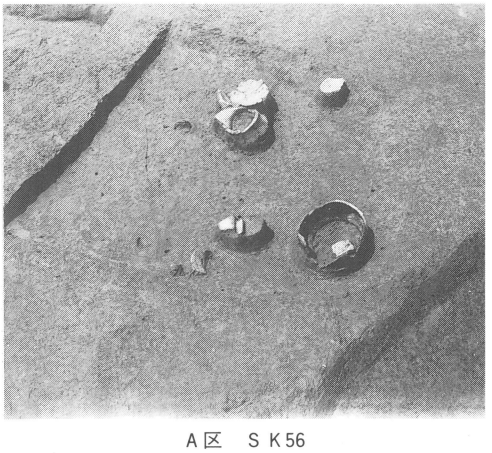
A区　弥生前期大溝と住居跡

A区　石器製作関連遺構（ＳＫ50）

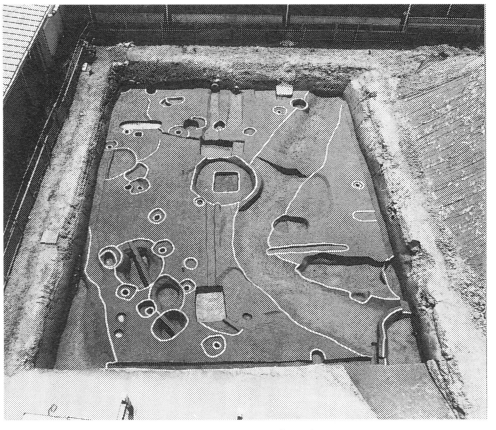
A区　大地型壺出土状況（ＳＫ28）



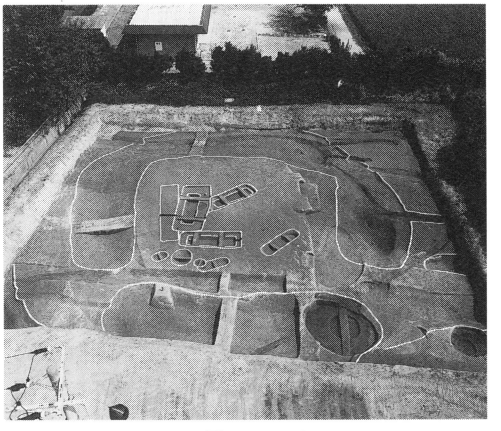
A区　ＳＺ10



A区　ＳＫ56



D区　下面完掘状況



F区　SZ13

F区　高杯出土状況（SZ13）

F区　S字甕出土状況（SZ13）

A区　地震痕（噴砂）

A区　地震痕（断層）

G区

小規模な調査区であるが、古墳時代初頭の水田跡を検出することができた（検出面の標高4.7m）。但し水田耕作土はいち早く削り採られ、その下層に発達した鉄・マンガン斑紋の分布により小区画（おそらく南北にやや長く、東西４～５ｍ）に区切られたやや不定形な水田の形跡を捉えることができる。マンガン斑紋層下位からはＳ字甕Ａ類新が、上面からはＢ類が出土しており、少なくとも廻間Ⅱ式期には水田が廃絶していたことが窺い知れる。

まとめ

今回の調査成果をまとめておくと以下の３点になる。

１．弥生後期の標式遺跡であるはずの山中遺跡は、今回の調査成果を踏まえると弥生時代前期の集落遺跡として改めて位置づけておく必要がある。また調査によって大溝で墓域と居住域に区切られた集落構造を明らかにでき、さらに点在する石器製作場の存在は弥生前期集落の研究に注目すべき内容を提供したといえよう。

検出した主要遺構は周溝墓７基・住居10棟・大溝２条・石器製作関連遺構５ヵ所。

２．弥生後期から古墳時代にかけては、居住域を構成していた形跡は一切認められず、分布が方形周溝墓に限定できるような在り方を示した。すなわち、山中遺跡は弥生後期以降墓域を形成していたという事になる。またＧ区での古墳時代初頭水田の可能性を考慮すると山中遺跡東側に生産関係の空間を設定できるのかもしれない。将来の調査に期待したい。

周溝墓は山中式期３基・廻間式期１基・所属時期不明２基を確認した。

３．山中式期に所属するＳＺ10・13では複数の墓坑を検出し、両者とも中心主体東西方向に主軸を置く、長軸が５～６ｍを測る大型のものであった。さらにＳＺ13は廻間Ⅰ式期に墳丘を、所謂「前方後方型墳丘墓」に改変した可能性が考えられ、墳丘墓の在り方に新しい知見を提供した。

以上の諸点から一宮市萩原町山中遺跡は、弥生時代前期から集落が形成され、中期に一旦中断し、再び後期に墓域として利用されるという大きな変遷が追える。こうした遺構の消長がなにを物語るかはより広範囲の遺跡調査が必要であり、また周辺の遺跡である南木戸・苗代・二夕子遺跡等を含めた萩原遺跡群としての視点も重要となろう。

調査にあたってＧ区では、特に静岡大学名誉教授加藤芳郎氏に水田耕土について御教示賜わった。

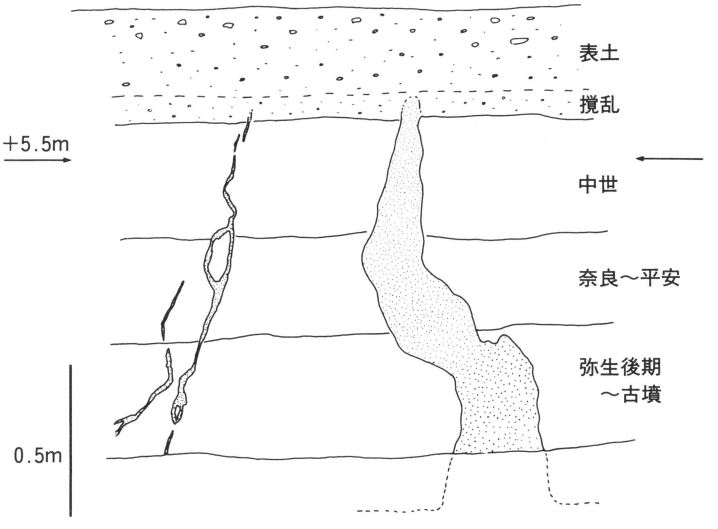
（赤塚次郎）

山中遺跡の地震痕について

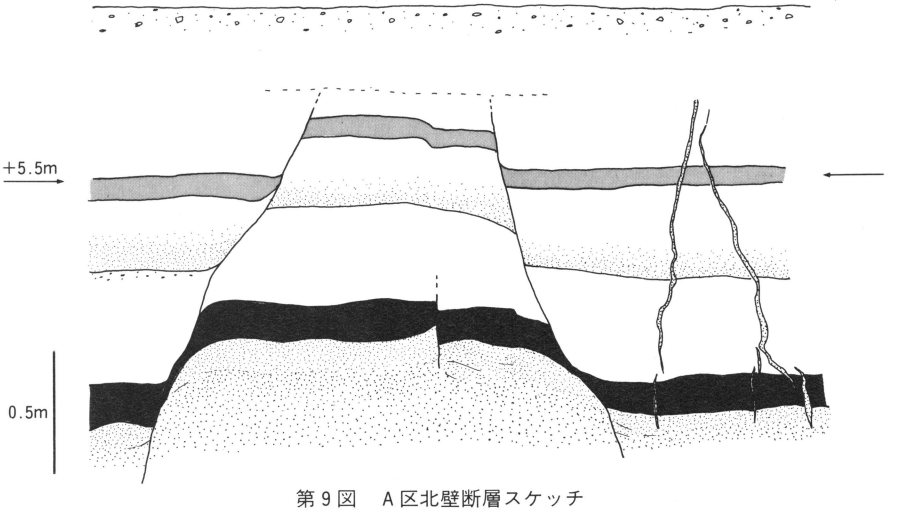
噴砂を伴う地割れは、90A区のSZ10の周溝に沿って東西方向に25m以上にわたって確認された。最大幅は20cmで、調査区外にも延びていた。

東壁断面において噴砂の粒度分析を行ったところ、噴砂の上部で細粒になっていることがわかった。また噴砂を供給した下位の砂層は、噴砂に比べ粗粒であった。このことから、地震によって液状化した砂が上昇する過程で分級作用を受けたことが推定され、噴砂のメカニズムを知るうえで興味深い。推定される地震については、噴砂の断面観察、及び噴砂の規模などから濃尾地震（1891年）である可能性が高い*。

また、90A区の北壁において2本の正断層が確認された。落差はともに約20cmである。表土以外は断層による変位を受けていることから、上記の噴砂と同時期であると推定される。一般に液状化した砂層は、再堆積の過程で堆積を減じると言われており、今回発見された断層も砂の液状化と噴出によるものと考えられる。（伊藤隆彦）



第8図　A区東壁　噴砂スケッチ



第9図　A区北壁断層スケッチ

＊通産省地質調査所寒川旭氏御教示による。